

## 喪失と受容——「野宮」——

森まり子

「拝み申すぞ有難き伊勢の神垣隔てなく」——諸国一見の僧が黒木の鳥居のある宮に泊まるという設定の、現代人にとつての違和感は、冒頭のワキの謡でさりげなく緩和され、「森の木枯秋更けて」「紅葉かた散り、浅茅が原もうら枯れの草葉に暮るる野の宮の」「心も澄める夕べ」の風情に、ごく自然に観客をいざなう。春には「花に馴れ来し野の宮」のある嵯峨野は、今や「猶しをりゆく袖の露」を見るまでに秋が深まっている。謡だけで想像させる季節の移ろいに「心の色はおのづから。千種の花にうつろひて」と、人の情の移ろいややさや無常を重ね合わせる。世阿弥と推定される作者は、『源氏物語』の賢木の巻の情趣に心憎いまでに忠実である。

源氏の愛が離れたと知った六条御息所は、斎宮に立つ娘の姫宮に付き添って決然と都を去り、野宮まで後を追って来た源氏と再会する。その秋の夕べを死後まで追憶するのである。僧を見ても「とくとくとく帰り

給へとよ」と追いつ返す素振りを見せ、人の助けを借りず孤独に昔の愛を偲ばんとする。葵上との確執にまつわる口惜しさや、源氏への未練といった妄執を黒木の鳥居から出ようとする所作で暗示し、その舞を見せ場として、僧の回向を背景に静かに立ち去ってゆく。

自分への愛のさめた男から凜として距離をおき、しかしはるばる訪ねて来た男を拒否はせず、隔てを置いて情を交わした思い出を愛惜する六条御息所には、既婚婦人にふさわしい落ち着いた気品、情愛の機微や陰影を知り尽くした成熟、情は必ず移ろうものという覚悟を秘めた諦念が漂う。同じく昔の愛を偲ぶ設定でも、「松風」の松風と村雨、「夕顔」や「半菫」の夕顔は、受け身に待ち続けるはかなさが特徴である。また愛人平宗盛と病に伏す老母の間に揺れ動く心の葛藤を描いた「熊野」の熊野も、誘う風に任せて散り過ぎる背景の桜のように従順な女である。古来「熊野」と「松風」は、恐らくは描かれる女性のはかなさと哀切、それに響き合う春と秋の情緒故に二大名曲とされてきた。

かつての私は、日本文化を単純に愛する気持ちから、その伝統の中に紛れもなく流れている「忍ぶ」精神に女らしいはかなさや美しさを見出し、それ故に熊野や松風に惹かれていた。春の盛りにある時、全てが明るい光の中に限りなく開けて見えるその季節には、人は疑問もなく、その陽光に映える表面的な美しさにのみ惹かれがちである。しかし季節が移ろい、秋になると、傾きかけた日差しの中では同じものが陰影を帯びて見えてくると同時に、秋が実りであると共に滅びにも通ずる季節であることを悟るようになる。そしてその滅びを意識し始めるからこそ、自己の中の移ろわぬ何かを、それまでになく強く求めるようになる。今も、従順さや慎ましさを美德としてきた日本文化への私の愛着の深さは、昔と少しも変わらない。

しかし秋の光の中にある今の私は、春の光の中では見えなかった「自己の中で、永久に、死後も移ろわぬ何か」を「野宮」の六条御息所の中に見出している。

若い時に見る「野宮」の印象は、幽玄の趣以外の何もでもない。しかし、年を重ねて見る「野宮」は、幽玄を超えて、痛切である。人が若き日にかくも憧れる成熟とは、喪失の痛みを代償として初めて手にするものであること、成熟した自我にはいかなる人も共有できない、冴え返るような孤独が伴われていることを改めて自覚させられるからである。

心の底では愛せずにはいられないにもかかわらず、高貴な身分の女にふさわしく距離を保ち、しかし求められれば抑制的に情を伝える御息所の、誇り高く主体的な自我。愛する故の弱さと、相手と対等であるうとする激しさを交錯させる、侵しがたいその気品。死後もなお愛の記憶を断ち切れず、独り苦しみ続ける哀切。追憶の中で男を待ち続けた末に世を去る素朴な松風、庇護者でもある男に対して自己主張をせず、愁いをにじませながらも美しくしとやかに終始する熊野を超えて、御息所のこの「自我」に私がただならず心惹かれるのは、古来の慎ましやかな美德に飽き足らず、今の私がこのような「自我」にこだわり渴望するのは、時間の有限性を意識させる秋の光の中にいるからなのであろう。「野宮」の六条御息所は、愛の喪失という、自分では如何ともしがたい現実を思い出しては苦しみ葛藤しながらも、最後には静かに喪失を受容していく。一見受け身であるが、内実において意志的なものを秘めたその姿に、名状しがたい尊厳と気品を見出し、自身の人生をそつと重ね合わせる人々は古来多かつたはずである。

人は、変えられない理不尽な現実をどのように受容していくのか。情とは、無常の世における束の間の

真実にすぎないのか。

それとも、人の心に刻まれるのみで、二度と再び帰来ない時間や情感の中にこそ、永遠ということの本当の意味はあるのだろうか。

ものみな枯れ果てる嵯峨野の宮所のわびしい情緒を漂わせた名曲の余韻に響くのは、中世からの長い年月を経て今なお色あせぬ、この問いである。

(平成二十四年七月八日 宝生能楽堂 金剛流「華宝会」上演)